

## ニュース

## 崑崙の植物相調査から (その 1)

## A Botanical Itinerary of Kunlun Mountains (1).

1988 年と 1990 年に崑崙山系の植物相を調査する機会があった。1988 年の調査は、中国青蔵高原総合科学調査考察として、1987 年から実施されたカラコルム・崑崙総合科学考察隊、1990 年は日中共同による中国可可西里地域総合科学探検への参加である。

1988 年の調査については、成果の概要が鄭他 (1989) により報告されている。私自身も調査紀行 (大場 1989a) や興味深い植物の紹介をした (大場 1989b, 1989c)。

1990 年の調査は NHK が番組制作し、日本では「秘境・大崑崙 世界最高の高原に行く」というタイトルで紹介され、現在までに世界の 20 局で放映されているという。

崑崙山脈の植物相は、1980 年代にいたるまでその概要さえ報告されたことがなかった。1980 年代になってその山麓地域の植物相が、新疆八一農学院編著による新疆植物検索表 (1982-85) あるいは張・張 (1986) など多少とも紹介されるようになってきた。

このように、崑崙、特にその山地や高山の植物相は研究上の処女地といえるが、その植物相は周辺の地域と密接な関連を有することは想像に難くない。特に、西のカラコムとパミール、東の青海、南のチベット、北の天山は、乾燥気候が卓越する地域であり、これらの地域の植物相は相互に類似性が高い。

崑崙の植物相もこれらの地域を内包する共通性の高い中央アジア高地植物区系区の一部であると推察される。

崑崙の植物を同定する上で、上記の諸地域の文献は不可欠である。中でも Gurbov を中心とした旧ソ連の研究者による *Plantae Asiae Centralis* は重要である。モンゴルの植物相に造詣の深い Gurbov は、天山からチベット、青海からパミールに至る地域の植物相は共通性が高いと考えている。これが上記の *Plantae Asiae Centralis* の出版

の意義でもある。

なぜ崑崙山脈の植物相に興味を抱いたのかは、すでに述べたが (大場 1989a)、ヒマラヤ山脈を南端とするチベット高原の北端が崑崙であり、広い意味でのチベット高原植物相の南北での相違を實現したかったこと、さらにヒマラヤ高山帯の植物相の形成過程で周北極地域の植物相との間に交流があったことが推定され、崑崙はそのコリダーの一部をなすのではないかと考えられたことが大きい。

1988 年の調査では、昆明植物研究所の武素功のほか、呉 玉虎、費 勇が植物相調査を担当した。採集した植物は昆明に保管され、重複品は東大に納めた。1989 年に武 素功らが採集した崑崙の標本もその重複品の一部が東大に寄贈された。

1990 年に採集した植物は数少ないが、標本は未だ入手していない。

武 素功を中心に崑崙植物誌の出版が計画されている。私はベンケイソウ科他若干の科を分担している。

この植物誌での分担に関係なく標本の一部は、山崎 敬先生が同定してくださった。

ところで、さきに記した紀行文 (大場 1989a) が一般を対象としたものであるため、崑崙の植物や植物相について紙面を割くゆとりはなかった。本稿は調査した地域ごとに興味深いと思われる種や植物相について記述することを試みたものである。崑崙さらには中央アジア高地の植物や植物相についての理解の一助となれば幸いである。

プーチン (布涼)

1988 年 6 月 14 日イエチェン (葉城) からピーシャン (皮山) 県タシカシ (塔什克什) を経てプーチン (布涼) へ行った。今回の調査では最も西側にあたる。

崑崙山脈でも、西側ではモンスーン、東は太平洋高気圧の影響を受け、かなりの降水がある。特にカラコルム山脈北面と崑崙山脈南面の山間にか

なりの降水があり、針葉樹林が広範囲に存在するといわれている。しかし、崑崙山脈北面では、その一部にビャクシン属の針葉樹林の発達をみるだけだが、記録では *Picea schrenkiana* Fisch. et C. A. Meyer というトウヒ属の種もあるといわれている。新疆植物検索表ではその産地にイエチェンを挙げており、その周辺での聞き取り調査でその存在の可能性が高かったので、これを確認するためにプーチンに来たのだった。

海拔 1800m まで、どうにかトラックその他でたどり着き、そこから馬と驢馬で 2,000m まで上り、沢辺にキャンプした。その沢の奥が問題の森林があるところらしい。

幅 5m ほどの沢なのに、遅れて到着した隊員は渡渉できない。夕方の大增水があり、氷河や凍土があると予想された。私自身の興味は、ここにトウヒ林が存在することよりは、高山植物相にあったから、氷河の存在するらしいことは嬉しかった。増水と同時に起こった激しい風の音や驢馬の絶え間ない唸り声などに寝苦しいはじめての崑崙山中の一夜を過ごした。

かつてイエチェン周辺は崑崙を越えインドに出る道があったことで知られている。マルコ・ポーロもその道を辿って現在の新疆に入ったといわれている。いまキャンプをしているところから崑崙山中に通じる径がかつてのその道ではないかということだった。そのような歴史的由緒のある径といっても幅はせいぜい 50cm ほどで、ヒマラヤ山中の径と似ているが、馬や驢馬で通れるように工夫されているのが違う。ところどころに馬を止めての休み場がある。たいがいの休み場は中心に 1 本の木があり、そこに馬を繋ぎ、この木陰で休む。この木の多くが胡楊である。

木村有香先生は、1989 年刊の野生植物木本篇(平凡社)で胡楊亜属は細分すれば約 9 種になるが、大きく分ければ *Populus euphratica* Oliver, *P. pruinosa* Schrenk, *P. ilicifolia* (Engl.) Rouleau の 3 種となる、と書かれている。現存ヤナギ中もっとも原始的と考えられるが、その形態的研究はまだ不十分とも記しておられる。

先の新疆植物検索表は胡楊に *Populus euphratica* をあて、灰葉胡楊 *P. pruinosa* とは、短枝の葉

に明らかに歯牙があることと、幼苗の葉が皮針形または線形であることから、全縁で、幼苗葉が広楕円形の灰葉胡楊から区別している。

胡楊に先生はコトカケヤナギという和名を与えられた。詩篇中最も感動的な一節、「われらバビロンの河のほとりにすわり、シオンをおもいて涙をながしぬ。われらそのあたりの柳にわが琴をかけた」に囚むが、リンネはこれをシダレヤナギと考え、これにバビロンを意味する種小名を与えたといわれる。

からからに乾いた空気のもとでは、暑くても木陰は涼しい。自分の馬を胡楊に繋ぎ、その大きな樹冠の下に座って、汗の引くまで休んだ。

山の斜面は一面芨芨草と呼ぶ、高茎のイネ科の多年草からなる草原である。学名は *Achnatherum splendens* (Trin.) Nevski で、この草原が際限な

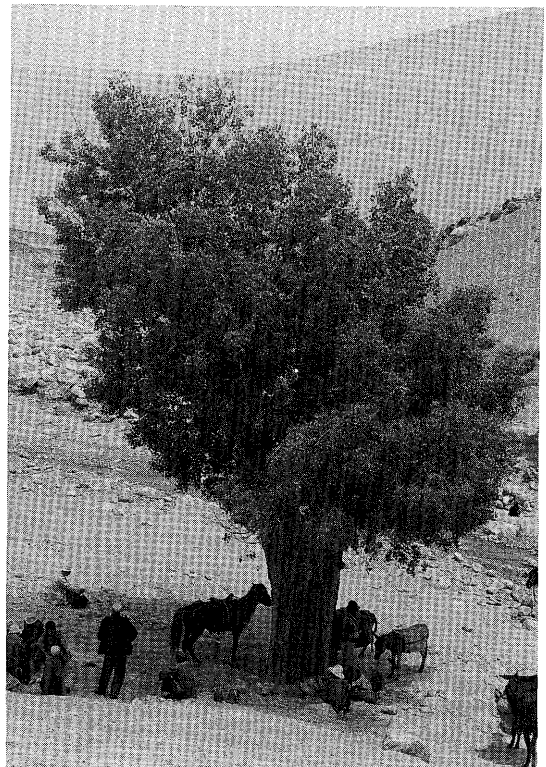


Fig. 1. *Populus euphratica* Oliver 胡楊, 日差しが強く乾燥した空気のもとで、格好の休み場所となっている。

く続く。馬も驢馬もこの草を少しも食べない。草丈は1mほどで、大株となり、多数の稈が叢生している。ススキの大群落に似てなくもないが、葉は強壯で厚く堅い。その草原が被う斜面の表面には表層土がなく、どこまでも掘れるレスのような細かい砂が堆積している。これが黄土というものなのかどうか知らないが、夕方の風はこの細砂を巻き上げ、空一面黄色と化す。葉の上にもその細かい砂が積もっている。

斜面を登った径は沢筋にでる。沢が蛇行しているのは、堅い岩盤があるためだが、その上流側には砂が堆積し、川床が広がっている。ところどころ風から遮断された斜面があるらしく、そこには薄い表土もあり、芨芨草以外の植物が生えていた。ここで、イワベンケイ属に出会った。変成岩の岩盤の下に堆積した岩屑の多い風化土壤に生えていた。根茎はあまり肥厚せず、短くは、地上部分は *Rhodiola quadrifida* (Pallas) Fisher et C. A. Meyer に多少とも似ているが、前年の枯枝が残らず、*R. quadrifida* の仲間とはいえない。雌雄異株で、花卉は淡黄色である。はじめてこれを見たとき、

*Rhodiola kashgarica* A. Boriss. と思った。この種は新疆西部の中心の町、カシュガル付近での採集品に基づいて命名されていたからである。しかし、1992年3月にそのタイプを見て、これが *R. kashgarica* とは異なることを知った。同じ型のイワベンケイはホータン(和田)の南奥でも採集したが、それより東側では出会わなかった。

ムカゴトラノオが生えていた。日本では産地が限られるが、周北極地域からヒマラヤにかけてばかりか、北半球の温帯から亜寒帯にかけて、広く分布する。イブキトラノオ属 *Bistorta* でもこのような広分布種はムカゴトラノオただ1種だけらしい。本属のように、1または少数の広分布種と多数の狭分布種という構成の属は、さきのイワベンケイ属をはじめかなりあるようだ。

ヒマラヤでは岩面にクッションをつくる *Androsace* がまさに泥の上にクッションをつくって生えていた。しかもその花からヒマラヤでみた *A. tapete* Maxim. そのものではないかと思われた(まだ詳しく調べていない)。(続く)

(大場秀章 Hideaki OHBA)



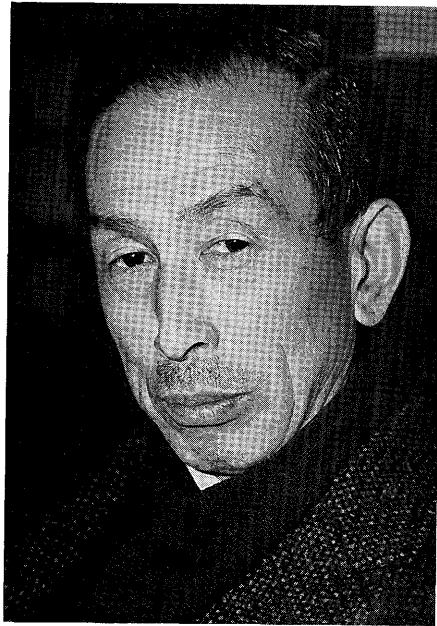
Fig. 2. *Rhodiola* sp. イワベンケイソウ属の一種。土の上に生える種類を見るのは初めてである。

## 引用文献

- 大場秀章 1989a. 秘境・崑崙山に行く 岩波書店  
 —1989b. 崑崙山脈の植物 プランタ No. 2 : 21-28.  
 —1989c. 世界一標高の高い砂漠—アルチン山自然保護区 採集と飼育 51 : 184-187.  
 新疆八一農学院 1982-85. 新疆植物検索表 全3冊  
 新疆人民出版社. Collegium Agriculaturae Aug. 1  
 Xinjiangense (ed.) 1982-85. Claves Plantarum Xin-  
 jiangensium. 3 vols. Editio Popularis Xinjiangensis.  
 鄭度 (Zheng D.), 幡裕生 (Pan Y. S.), 武素功

- (Wu S. G.), 張青松 (Zhang Q. S.) 1989. 崑崙山  
 山区総合科学考察的新発展 (Recent progresses of  
 the Integrated Scientific Expedition to the Kunlun  
 Mountains). 山地研究 (Mountain Research) 7 :  
 11-115.  
 張立運 (Zhang L. Y.), 張希明 (Zhang X. M.)  
 1986. 東崑崙山内庫木庫里盆地高寒草原の一般特  
 征 (General characteristics of Gaosai steppe in the  
 Cumcule Basin of the eastern Kunlun Mts.) 干旱区  
 研究 (Arid Zone Research) 3 : 59-65.

## 追悼



Y. Kobayasi

## 小林義雄氏をいたむ

Dr. Yosio KOBAYASI 1907-1993

本誌編集員小林義雄博士は今年1月6日急性心不全のため逝去されました。享年87。謹んで御冥福をお祈りいたします。

明治40年(1907)5月17日出生, 本籍は東京市浜松町4丁目。当時熊本大林区署(今の営林局)に勤務されていたお父様の任地熊本市出京町で生まれた。

4歳の時から東京へ帰り, 根岸小学校・府立第5中学校・第1高等学校理科甲類を経て, 昭和6年(1931)東京帝国大学理学部植物学科を卒業。同年9月東京文理科大学助手に任官, 同8年講師になった。

昭和15年(1940)菌類の論文で理学博士。同16年(1941)文理大を退官して, 新設の満州国立博物館薦任官となった。間もなく太平洋戦争開戦。